

いきいき 健康生活
鴻巣市広報「かがやき」 平成20年2月15日号 掲載
熱傷（やけど）

熱傷の重傷度は熱により皮膚が障害を受ける深さとその広さによって決められます。深さのレベルは4段階に分けられています。

度の表皮熱傷は痛みを伴い皮膚が赤くなる程度で済みます。熱傷などによる浅達性 度熱傷では水疱の底の真皮が赤みを帯びて痛みが強いものの、通常1～2週間で治癒します。

ここまでは、通常、瘢痕を残すことなく治ります。一方で、油やストーブ、炎などによる高温の熱傷では、皮膚の深部まで障害が及んで、皮膚潰瘍（かいよう）や皮膚欠損となり手術や長期にわたる治療を必要とします。また、治療後も瘢痕として後遺症を残すこととなります。

【治療】

やけどを受傷したらすぐに水道水などの流水で20分程冷やすことが重要です。冷却により皮膚への障害の進行を防ぐと共に、炎症を抑え痛みを緩和する効果があります。そして、すみやかに医療機関を受診してください。

熱傷部は感染しやすく、もとは浅い熱傷でも、感染によって皮膚の障害が進行して、深い熱傷となってしまう、瘢痕拘縮などの後遺症を残すことがあります。ですから感染予防のために毎日の創部洗浄が重要な処置となります。

【低温熱傷】

湯たんぽ、カイロ、電気あんかなどの暖房器具による、比較的低温で長時間接触することにより起こる熱傷を低温熱傷といいます。

見た目は小さくてたいしたことのないやけどに見えますが、思った以上に重症であることが多いのが特徴です。多くの低温熱傷は皮膚潰瘍を作り瘢痕を残します。

低温熱傷の予防としては、湯たんぽには熱湯を使わない、寝ている人に後から暖房器具を使わない、貼付型のカイロを長時間使用しない、知覚（感覚）障害のある人には使用しないなどの注意が必要です。